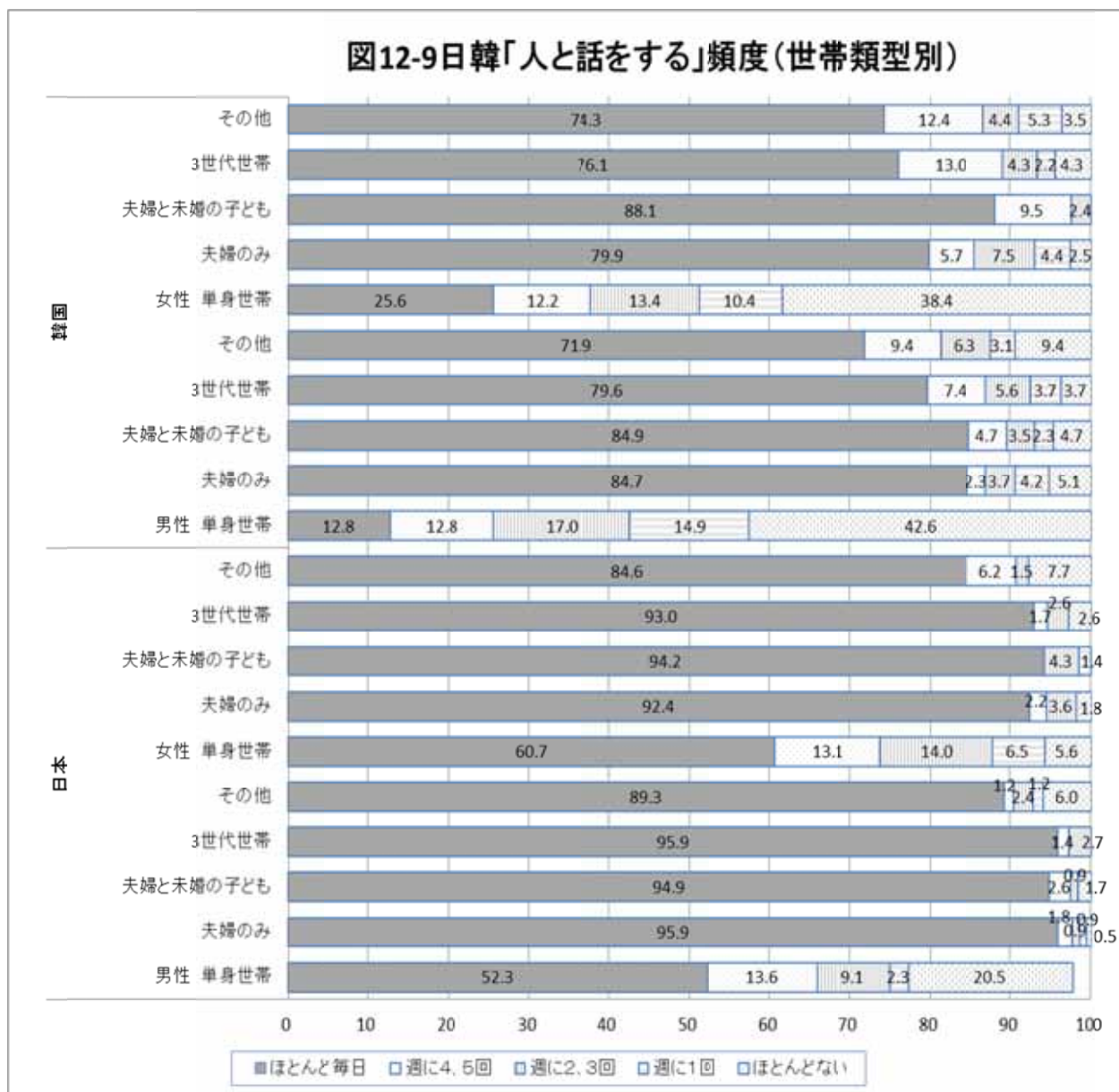


図12-9日韓「人と話をする」頻度(世帯類型別)



(2) 同居の家族以外に頼れる人

「病気の時や、一人ではできない日常生活に必要な作業が必要な時、同居の家族以外に頼れる人がいるか」(Q44、クロス表 59) についてみると、日韓は他の3か国に比べ延回答数が少なく、「友人」や「近所の人」への期待も相対的に低いレベルに止まっている。「別居の家族・親族」(日本 60.9%、韓国 53.7%)、「友人」(同 17.2%、18.3%)、「近所の人」(同 18.5%、23.1%)、「その他」(同 3.3%、6.8%)、「いない」(同 20.3%、20.0%) となっており、「別居の家族・親族」に集中している。

高齢者の属性別にみると、「郡部」、「小都市」にいくほど「近所の人」や「別居の家族・親族」の割合が高くなり、「友人」の割合は低くなっている。「いない」の割合は大都市に

においてより高くなっている。世帯類型別にみると、韓国の「単身世帯」(48.8%)、日本の「3世代世帯」(51.1%)で「別居の家族・親族」への期待が相対的に低くなっている。

(3) 近所の人たちとの交流・付き合い方、親しい友人の有無

「単なるあいさつを除いて、週に何回ぐらい、近所の人たちと話をするか」(Q45、クロス表 60)についてみると、「ほとんど毎日」(日本 22.7%、韓国 40.9%)、「週に4、5回」(同 9.4%、18.0%)、「週に2、3回」(同 19.9%、16.5%)、「週に1回」(同 16.3%、11.7%)、そして「ほとんどない」(同 31.6%、12.8%)となっている。平均会話頻度をみると(「無回答」を除く)、日本 2.7回、韓国 4.2回とその差は歴然である。両国とも、女性より男性の会話頻度がやや低く、最も会話頻度の低い「単身世帯」では男女間の差異がさらに広がる。都市規模別では、日本の「郡部」、韓国の「小都市」において会話の頻度が高くなっている。

「近所の人たちと交流がある高齢者の具体的な付き合い方」(Q46、クロス表 61)についてみると、日韓の付き合い方の特徴がよく表れている。日韓間では「お茶や食事を一緒にする」(同 29.3%、64.2%)、「物をあげたりもらったりする」(同 51.6%、1.7%)において差異が大きいが、「外でちょっと立ち話をする程度」(日本 70.7%、韓国 51.3%)の割合が経年的に増加している点は共通している。その他、「相談ごとがあった時、相談したり相談されたりする」(同 22.6%、29.0%)、「趣味をともにする」(同 20.2%、18.4%)などの交流方法も上位を占めている。

第3回調査と比べると、韓国では「お茶や食事を一緒にする」(17ポイント増)、「外でちょっと立ち話をする程度」(9ポイント増)を除くすべての項目において減少がみられる。特に、「相談ごとがあった時、相談したり相談されたりする」(22ポイント減)、「家事や用事をしたり、してもらったりする」(26ポイント減)、「病気の時に助け合う」(24ポイント減)、「物をあげたりもらったりする」(16ポイント減)等、いずれの項目でも大幅な減少がみられる。一方の日本は、「外でちょっと立ち話をする程度」(22ポイント増)、「物をあげたりもらったりする」(10ポイント減)の他に大幅な増減変動はみられない。

高齢者の属性別にみると、日本の「郡部」、韓国の「小都市」においてより多様な方法で近所付き合いが行われている。男女間の差異としては、両国とも、延回答数が男性(日本 189.0%、韓国 173.8%)より女性(同 235.6%、194.4%)の方に高いことが注目される。交流内容での違いをみると、日本の場合「お茶や食事を一緒にする」(男性 17.7%、女性

38.5%)、「物をあげたりもらったりする」(同 42.1%、59.1%)で、一方の韓国は、「家事や用事をしたり、してもらったりする」(同 6.1%、14.5%)、「病気の時に助け合う」(同 4.2%、13.5%)で差が大きくなっている。

「家族以外に相談あるいは世話をし合う親しい友人がいるか」(Q47、クロス表 62、63)についてみると、日韓はともに同性の友人に集中する傾向にある。特に韓国にその傾向が強く、「異性の友人がいる」(日本 1.0%、韓国 0.8%)、「同性と異性の友人が」(同 19.5%、5.0%)ともに低率である。そして、「いずれもない」(日本 26.2%、韓国 31.3%)の割合が他の3か国(11.4~17.7%)に比べ高くなっている。友人がいる割合を男女別にみると、日本は女性の方が、韓国は男性の方が相対的に高くなっている。両国ともに、単身世帯(日本 73.5%、韓国 61.1%)で友人がいる割合が低くなっている。都市規模別にみると、日本ではほとんど差異がみられないが、韓国では「大都市」(74.4%)、「中都市」(64.6%)、「小都市」(63.1%)の順に友人がいる割合が低くなっていく。第1回調査と比べると、ほとんど変化のない韓国に対し、日本では「同性と異性の友人がいる」の割合が10ポイントほど増加している。

(4) ボランティア活動への参加状況、参加しない理由

「現在、福祉や環境を改善するなどを目的としたボランティアやその他の社会活動に参加しているか」(Q48、クロス表 64)についてみると、日韓は他の3か国より低い参加率を示す。特に韓国は、「宗教・政治活動」(8.4%)を除くすべての項目において3%未満に止まっている上に、「以前には参加していたが、今は参加していない」(日本 17.0%、韓国 8.1%)の割合も低い。一方の日本は、「近隣の公園や通りなどの清掃の美化活動」(14.2%)、「地域行事、まちづくり活動」(13.3%)などで高率を示す。両国ともに、単身世帯において特に低い参加率を示す。

「ボランティア活動の経験の有無にかかわらず、現在参加していない理由」(Q49、クロス表 65)についてみると、「関心がない」(日本 15.9%、韓国 47.6%)、「時間的・精神的ゆとりがない」(同 32.2%、38.7%)、「健康上の理由、体力に自信がない」(同 31.5%、24.2%)、「やりたい活動が見つからない」(同 10.3%、25.0%)とする意見が多い。「経済的余裕がない」(同 2.1%、16.0%)という理由は韓国のみで高い割合を占めているが、韓国の第6回調査の値(26.3%)に比べると大幅に減少している。高齢者の属性別にみると、健康・体力と関わる理由を選択した人は、女性、日本の「郡部」や韓国の「小都市」において高

い割合を占めている。さらに、韓国の単身世帯では、「経済的余裕がない」と回答した高齢者の割合がその他の世帯類型に比べ5～10ポイント程度高くなっている。

(5) 学習活動への参加状況、参加しない理由

「現在、学習活動に参加しているか」(Q50、クロス表 66) についてみると、韓国は「地方自治体など公的機関が高齢者専用で設けている高齢者学級や老人大学」(5.5%)を除くすべての項目において3%を下回り、「参加していない」の割合は89.8%に上る。日本の場合も「参加していない」の割合が78.1%と高く、時系列的に増加傾向にある「カルチャーセンターなどの民間団体が行う学習活動」(12.9%)を除くほとんどの項目において参加率は5%未満の水準に止まっている。高齢者の属性別に有意な差異はみられないが、日本では「カルチャースセンターなど」での学習活動に関して、年齢が若いほど、男性より女性、さらに都市部において高い割合を示す。ところで、韓国の「小都市」の高齢者は、すべての項目において参加率がゼロとなっており、学習活動には全く参加していないのが現状である。なお、「現在、学習活動に参加していない人の不参加の理由(Q51、クロス表 67)についてみると、前述のボランティア活動に参加していない理由と類似している。

(6) 情報機器の利用状況、利用しない理由

「情報機器を使って、家族や友人と連絡をとったり、情報を探したりしているか」についてみると(Q52、クロス表 68)、両国ともに「携帯電話やPHSで家族・友人などと連絡をとる」(日本58.6%、韓国78.1%)の割合が最も高く、情報機器の「いずれも使わない」の割合は日本35.6%、韓国20.5%である。日本は、ファックス、電子メール、インターネットなどにおいて15%程度の利用率を示すのに対し、韓国はこのいずれの項目においても3%未満に止まっている。「いずれも使わない」の割合を第5回調査(日本78.9%、韓国79.7%)と比べると、日本は43ポイント、韓国は59ポイント減少しており、高齢者の情報機器の使用環境が大きく変化していることがわかる。両国ともに年齢が上昇するほど、男性より女性において利用率が圧倒的に低くなっている。「いずれも使わない」の割合は、日本は男性が29.2%、女性が40.9%であり、韓国は男性が11.7%、女性が27.2%と、両国ともに女性は男性の2倍に近い高率である。都市規模別では「郡部」、「小都市」にいくほど「いずれも使わない」の割合が高くなり、大都市に比べると約15ポイント程度の差異がみられる。

情報機器を利用していない高齢者にその理由（Q53、クロス表 69）を尋ねたところ、「必要性を感じないから」（日本 74.6%、韓国 62.1%）、「使い方が分からないので、面倒」（同 26.8%、20.4%）の割合が高くなっている。そして韓国の場合は、「お金がかかるから」を選択した高齢者が相対的に多い（同 2.1%、28.6%）。時系列的には、日韓ともに、これらいずれの項目も減少傾向にある。男女別でみると、「必要性を感じないから」（日本男性 79.0%、日本女性 72.0%、韓国男性 56.9%、韓国女性 63.9%）と、「使い方が分からないので、面倒だから」（同 19.1%、31.4%、9.8%、23.9%）において差異がみられる。

8 不安、関心、満足度

（1）悩みやストレスの有無、内容

「現在、日常生活で悩みやストレスがあるか」（Q54、クロス表 70）についてみると、「まったくない」（日本 48.4%、韓国 38.0%）、「少しはある」（同 45.2%、45.3%）、「大いにある」（同 6.3%、16.7%）となっており、ストレスや悩みを抱える高齢者の割合は韓国で相対的に高くなっている。しかし、時系列でみると、第5回調査に比べ、韓国は「まったくない」の割合が10ポイント程度上昇している。両国ともに、高齢者の属性別に目立った差異は認められない。但し、韓国の都市規模別では「まったくない」の割合が、「大都市」30.2%、「中都市」42.8%、「小都市」50.0%となっており、「大都市」より「小都市」の方で悩みやストレスが少ない結果となっている。

「日常生活で悩みやストレスがある高齢者の悩みやストレスの内容」（Q55、クロス表 71）についてみると、両国は程度の差はあるが、ストレスや悩みの内容はおおむね類似している。「自分の健康や病気について」（日本 41.0%、韓国 48.0%）、「子どもや孫の将来について」（同 25.1%、21.5%）、「同居している家族の健康や病気について」（同 18.5%、20.7%）、「家族との人間関係について」（同 11.8%、22.8%）が主に挙げられている。一方、「生活費について」に関しては日韓の差異が顕著であり（同 13.8%、42.2%）、韓国の高齢者の厳しい経済状況をうかがわせる結果となっている。日韓とも年齢が上昇するほど高齢者自身の健康や介護について、そして単身世帯においては生活費について心配する割合が相対的に高くなっている。日本の「郡部」では、「生活費について」及び「子供や孫の将来について」の心配が他の地域より10ポイント程度高率を示している。一方の韓国の「小都市」では、「生活費について」及び「家族の人間関係について」の割合が相対的に低く、「自身の健康や病気について」の割合が高くなっている。これは、「小都市」において有職率及び

単身世帯率が高いことが背景にあるものと考えられる。

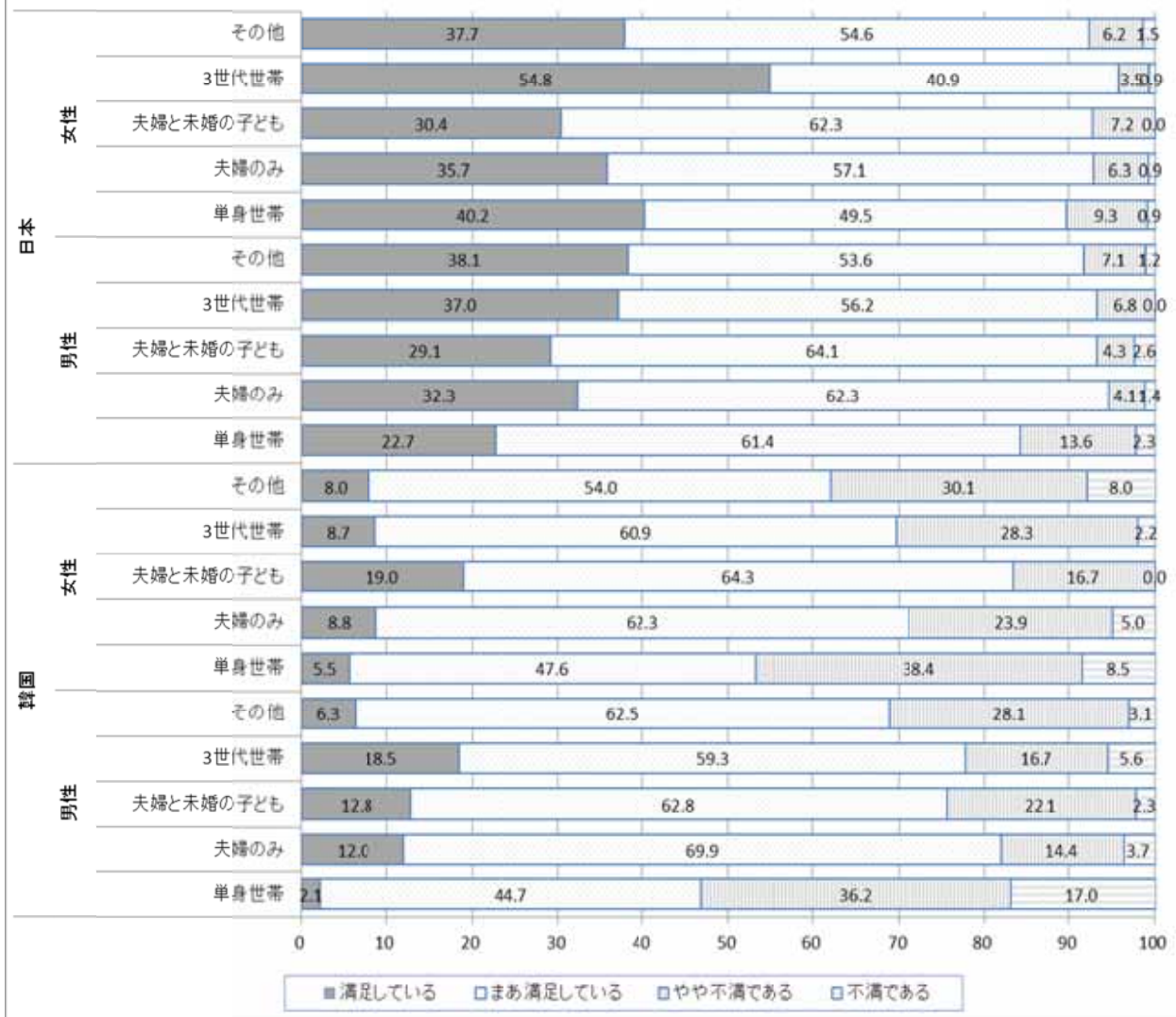
（２）生きがいを感じる時

「生きがい（生きていることの喜びや楽しみを実感すること）を感じるのはどのような時か」（Q56、クロス表 72）についてみると、日韓ともに「夫婦、家族や友人との時間」が首位となっている。また、おいしいものを食べる時や旅行、テレビ・ラジオを楽しむ時に生きがいを感じる点でも共通している。対照的な項目としては、「趣味に熱中している時」（日本 39.4%、韓国 10.3%）、「収入があった時」（同 9.2%、30.9%）が注目される。男女別にみると、両国ともに、男性は「仕事にうちこんでいる時」、「趣味に熱中している時」、「夫婦団らんの時」、「社会奉仕や地域活動をしている時」で、女性は「友人や知人と食事、雑談している時」、「テレビを見たり、ラジオを聞いている時」、「おいしいものを食べている時」などにおいて相対的に高率を示す。都市規模別では、日本の「郡部」では、「旅行に行っている時」、「趣味に熱中している時」、「おしゃれをする時」が相対的に低い割合となっている。韓国の「小都市」では、「子供や孫などの家族との団らんの時」、「友人や知人と食事、雑談している時」、「旅行に行っている時」、「収入があった時」、「おいしいものを食べている時」などで相対的に高率を占めている。

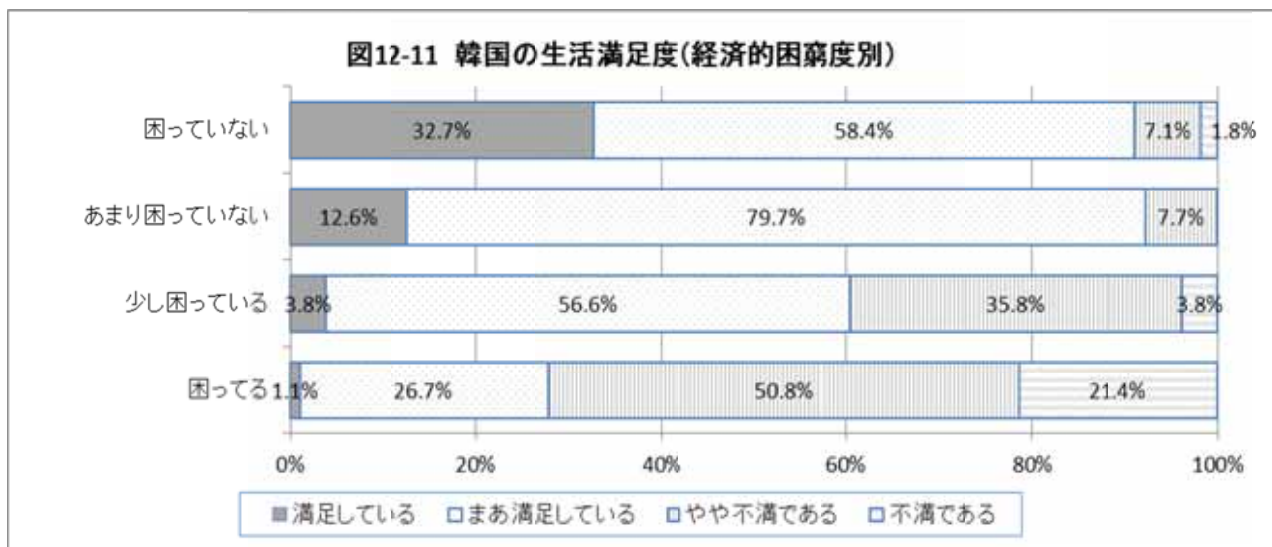
（３）生活の総合満足度

「現在の生活に満足しているか」（Q57、クロス 73）についてみると、他の３か国の「満足している」の割合が６～７割の水準であるのに対し、日本は 36.3%、韓国は 9.8%と非常に低い割合となっている。第４回調査と比べると、満足度（「満足している」、「まあ満足している」を合わせた割合）が、日本では５ポイント、韓国では７ポイント程度増加している。

図12-10日韓生活満足度(世帯類型別)



高齢者の属性別では、日本は男性、年齢の高い方で、韓国は男性の方で満足度が相対的に高くなっている。世帯類型別にみると、日本の女性を例外とすると、単身世帯において満足度が相対的に低くなっている。特に韓国の単身世帯の満足度が低く表れている。韓国の高齢者の経済的困窮度と生活満足度をクロスしてみると（図12-11）、「(まあ)満足している」の割合は、経済的に「(あまり)困っていない」では90%以上であるのに対し、「少し困っている」60.4%、「困っている」27.8%と顕著な差異がみられる。



9 政策に対する態度

(1) 政策全般において、高齢者や若い世代に対する対応のあり方

「今後、政府の政策全般において、高齢者や若い世代に対する対応をどのようにしていくべきだと考えるか」(Q58、クロス表 74) についてみると、両国ともに「高齢者をもっと重視すべき」が最も高く支持されている(日本 49.0%、韓国 59.5%)。時系列でみると、「高齢者をもっと重視すべき」(同 8 ポイント増、14 ポイント減)、「若い世代をもっと重視すべき」(同 2 ポイント増、6 ポイント増)、「現状のままでよい」(同 6 ポイント減、9 ポイント増)となっている。韓国の場合、「高齢者をもっと重視すべき」が最も高い割合を示すものの、若者関連政策へのニーズも高まっており、政策全般への努力を促す形となっている。男女別でみると、日韓ともに男性の方に「高齢者をもっと重視すべき」だとする意見がやや高い。また都市規模別では、日本では、大都市にいくほど「高齢者をもっと重視すべき」の割合が高くなっているが(「東京都 23 区・政令指定都市」55.9%、「郡部」40.4%)、韓国ではそのような傾向はみられない。一方、韓国では「単身世帯」において「高齢者をもっと重視すべき」の割合が高くなっている(男性 80.9%、女性 62.8%)。前述の経済的困窮度や生活の総合満足度同様、韓国において「単身世帯」の高齢者が厳しい生活状況にあることを示唆する結果として考えられる。

(2) 高齢者に対する重要な政策や支援

「高齢者に対する政策や支援で大切だと思うもの」(Q59、クロス表 75) についてみると、「医療サービス」(日本 59.5%、韓国 61.8%)、「介護や福祉サービス」(同 60.9%、53.1%)、

「公的な年金制度」(同 57.6%、43.9%)が高い比重を占めている。韓国は「働く場の確保」(同 24.3%、54.6%)が高率を占めているが、時系列的にも、第5回調査以降継続的に増加する傾向にある。

高齢者の属性別で見ると、日本は、75歳以上の年齢層、「3世代世帯」、「郡部」において、ほぼ全選択肢について低い割合を示す。一方の韓国は、都市規模別による差異が目立ち、「働く場の確保」(「大都市」60.2%、「小都市」45.2%)、「公的な年金制度」(同 36.7%、58.3%)、「医療サービス」(同 59.3%、65.5%)、「介護や福祉サービス」(同 53.5%、59.5%)、「高齢者に配慮した街づくり」(同 18.6%、25.0%)となっており、全般的に「小都市」において政策に対する要望がより高く表れている。

(3) 社会保障制度の水準や負担のあり方

「社会保障制度の水準や負担のあり方に関する考え」(Q60、クロス表 76)についてみると、日韓の社会保障制度の成熟度を示唆するような結果となっている。「たとえ、今後、税や保険料の負担を増やすこととなっても、社会保障制度の現在の水準はできるだけ維持すべき」(日本 38.8%、韓国 17.0%)、「負担を増やしても現在の水準から向上させるべき」(同 29.2%、50.1%)と、社会保障水準の向上に対するニーズは韓国の方により高い。高齢者の属性別にみると、日韓ともに男性、年齢が低い層、大都市において「負担を増やしても水準を向上させるべき」という意見がより支持されている。

(4) 老後の生活費に対する考え方

「老後の生活費について、どのように考えるか」(Q61、クロス表 77)についてみると、日韓ともに「働けるうちに準備し、家族や公的な援助には頼らないようにすべきである」(日本 47.8%、韓国 49.7%、以下、「自立型」と、「社会保障など公的な援助によってまかなわれるべきである」(同 42.9%、43.1%、以下、「社会保障型」とが拮抗している。一方、「家族が面倒をみるべきである」(同 7.2%、6.6%、以下、「家族依存型」)は最も低い割合を占め、時系列的にも大幅に減少している。一方、両国ともに属性別の一貫した傾向はみられないが、60-64歳層において「自立型」が過半数を占め、3割台に止まっている85歳以上層とは対照的である。